

シリーズ：進化し続ける産総研のコーディネーション活動(第34回)

地域ニーズ志向型コーディネーションを目指す

北海道産学官連携センター

イノベーションコーディネータ おおた えいじゅん 太田 英順

駆け出しのころ

産総研が発足した2001年春、私は最年少のコーディネータでした。当時は産総研の各地域センターを巡ってコーディネータ会議が行われ、企業訪問やセミナーを同時開催して、ご当地の産・学・官との交流を深める試みがありました。全国各地で地域産業の特徴やプロジェクト事例を学んで、コーディネータとしてのノウハウを蓄積できたことと、自分が担当する北海道を外部から眺める視点を得たことは大きな収穫でした。

地域のニーズに応える ～ コーディネータのこだわり

新米コーディネータの私は「何よりも重要なのは地域の企業に認知されること」と考え、少ない時間で多くの企業と接触するチャンス求めて、道内各地の催事に足を運びました。セミナーなどを行う際は「中小企業の社長さんたちが面白いと言ってくれる話」を選ぶことにこだわりました。

また、来客が気軽に足を運べる「下町の活動拠点」を目指して産学官が協力し、「リサーチ&ビジネスパーク札幌大通サテライト」(愛称HiNT)を2004年に開設しました。ここの事務局を務めることで、北海道内外の産学官連携に携わる人々と顔を合わせることができ、連携の密度を高めることができました。

このように敷居を低くすれば、北海道センターだけでは対応できない課題に直面する機会も増えます。「全産総研で対応」という考え方は当初からありましたが、航空機移動が必要となるようでは効率的なコーディネーションができません。

ん。地域の公設研や大学に技術的課題への対応をお願いするケースが多くなります。けれども、このような努力を重ねることにより地域における産総研の認知度と信頼度が高まり、結果的には産総研の出番が増えていくものと考えています。

楽しみなこと ～ コーディネータの想い

北海道の基幹産業は一次産業です。これをベースとした食関連産業を強化して北海道の底力を上げようとするのが北海道フードコンプレックス(HFC)構想で、北海道庁や北海道経済連合会が先導してその結実を図っています。この構想では食そのものに目が向けられがちです。しかし、一次産業のための廃棄物処理・活用や支援機器開発などを地域企業が主体となって展開して(図2)、農・林・水産業それぞれを強化しなければ、HFCのベースが崩れ落ちることになります。

いま私は、この問題に対して北海道センターの研究成果を活用するために、農業排水処理システムや小型・低コストのバイオメタン生成システムの開発、あるいは食品加工残渣の機能性食品化といったプロジェクトを手掛けています。今後は一次産業の作業現場を支援する機器の開発にも挑戦していきたいと考えています。

北海道をオランダなみの食品輸出基地にするというHFC構想の実現に向けて、どのように産総研の技術を活用するか——と考えるのは楽しいことです。そして、自分の参加したプロジェクトの成果を、おいしくて体にも環境にも優しいディナーとして味わえるのであれば、これ以上の幸福はありません。



図1 2011年12月に開催されたHiNT主催の「北海道産学官プラットフォーム」で、開催地(帯広・十勝)の参加者たちの質問に答える筆者
北海道産学官プラットフォームについては <http://www.hint-sapporo.jp/documents/index/13> を参照

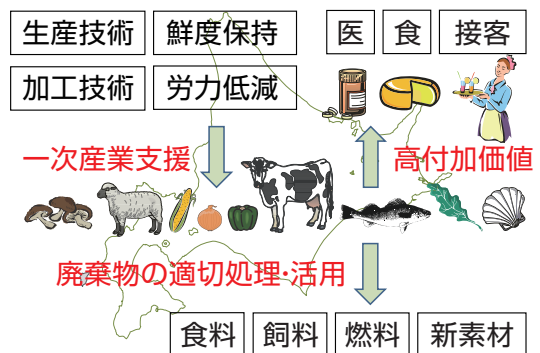


図2 北海道の良質で豊富な一次産品を末永く活用するために重要な3つの技術群(付加価値を与える、一次産業支援、廃棄物の適切な処理と活用)